

まずは、東宝作品から堀川弘通監督『青い野獣』（1960年）から。プロデューサーは藤本真澄と金子正且、脚本は白坂依志夫、撮影は中井朝一、助監督恩地日出夫とあります。白坂依志夫のオリジナル作品で、スタンダールの『赤と黒』の日本版とも言えるべき作品です。筋自体は野心あふれる若者の成り上がりぶりを描き、その冷酷さと凶暴さをリアルに表現していきながら最終的に破滅へと導きます。白坂依志夫の旧来でない新感覚が冴えます。白坂依志夫は前年の1959年に須川栄三監督の『野獣死すべし』の脚色を手掛けていて、本作もその流れを汲んでいることが明白です。大藪春彦原作の作り出した主人公伊達邦彦の系譜の人物像をここでスケールアップし、よりリアリズムに徹したかのようです。政治の季節の真っ只中にあり、激情型の大島渚とは対照的な突き抜けたニヒリズムの圧倒的な表現とも言えるでしょう。アンチヒーローが主人公であることから東宝によっても冒険的な作品づくりであり、敢えてか専属の俳優の起用を避けたのでしょうか。五社協定の厳しい締め付けの中で、俳優座の仲代達也を起用したことは東宝にとってのリスクヘッジとも考えられます。本作に関しては、主要な登場人物はほとんど俳優座の面々です。この役を他の俳優の起用で考えるなら山崎努でしょうが、この年に岡本喜八作品で映画デビューしたばかりで、一躍脚光を浴びるのは、1963年の黒澤明作品『天国と地獄』でした。1959年から1961年にかけて公開された小林正樹監督の超大作『人間の條件』（松竹作品）の主演を務めながら、仲代達矢のアンチヒーローとしての実像は、1961年の黒澤明作品『用心棒』の卯之助に行き着くことになります。堀川弘通監督の演出は堅牢かつ骨太であり、細部までの配慮を欠かすことはありません。堀川弘通という映画監督の作品には注意を怠ることはできません。

ケン・ラッセルという映画監督を覚えていらっしゃると思えば、おそらくそれ相当の年齢に達した方ではないでしょうか。そのケン・ラッセル（1927-2011）の映画デビュー作は『フレンチ・ドレッシング』（1964年）でした。ケン・ラッセルは元々TV界の人物であり、TV界での仕事はBBCの芸樹系の教養番組「Monitor」を担当したり、俳優を起用した「再現ドラマ」の手法を導入したドキュメンタリー作品を制作した実績は、まさに現在のドキュメンタリー作品の基礎を築いたとも言えます。1962年にイギリスの作曲家エドワード・エルガーの生涯を描いた「エルガー」が絶賛されたケン・ラッセルは映画界からのオファーを受け制作に臨むことになります。ストーリーは、イギリスの寂れた海辺の街を舞台に、カンヌ映画祭を真似た映画祭を開催して町おこしを図ろうとし、フランスから本物の女優を呼んだことから起こるドタバタ劇で明らかにジャック・タチを意識した作品となりました。呼んだはずのフランスの女優がポルノ映画専門の女優であったことということで、異分子のセクシャリティが保守的なコミュニティを揺るがすのですが、これは木下恵介の『カルメン故郷に帰る』ともシンクロしているのです。『カルメン故郷に帰る』が戦後日本の素朴な村落にアメリカナイズされた大衆文化が侵入する様をユーモラスに描いたように、本作ではイギリスの寂れてしまった伝統的なリゾート

地が、フランス（カンヌ）的な華やかさやセクシーさを借りて必死に町おこししようとする滑稽さを全面に出します。これは、地方の近代化・観光化への批判を柔らかに表現したとも言えます。ケン・ラッセルは本作での酷評を受けて、再びTV界に戻ります。そして、1969年D.H.ロレンス原作の『恋する女たち』で映画界に戻り大ヒットを飛ばします。TV界ではクラシックの音楽家たち、前述したエルガーを始め、ドビュッシー、リヒャルト・シュトラウス、ワーグナーらを取り上げ高い評価を受けているようです。こうした音楽に造詣の深いケン・ラッセルは映画でもチャイコフスキーを主人公にしたリチャード・チェンバレン主演の『恋人たちの曲』（1970年）『マーラー』（1974年）を遺します。また、1975年にはロック・オペラ『トミー』も監督します。アヴァンギャルドでエキセントリックな作風は毀誉褒貶な一面がありました。チャイコフスキーをよりスキャンダラスに描いた『チャイコフスキーの妻』（2022年）のキリル・セレブレンニコフの登場の前ではその輝きを失った観が残念ながら否めません。（文中敬称略）